

### 名将・武田信玄と碁

古作 登 (大阪商業大アミュージメント産業研究所主任研究員)

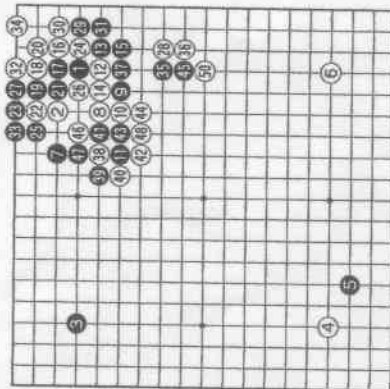
豊臣秀吉や徳川家康といった武将が碁を好んだことはよく知られているが、その少し前に天下をうかがった武田晴信、のちの武田信玄 (1521~1573) にも碁に関する逸話が残されている。

第15回

父・信虎の後を継ぎ甲斐国 (現在の山梨県) の戦国大名となった晴信は出家して信玄と名乗り、織田信長が1571年、比叡山焼き討ちを行った際には天台座主を甲斐国で保護するなど仏教を支援した。信玄の配下には優れた武将が多かったことでも有名だが「武田四天王」の一人、高坂昌信 (1527~1578) と1566年に打った碁が江戸時代の『爛柯堂碁話』(林元美・著) に出てくる。

信玄は昌信 (またの名を弾正) の初手星に対しケイマにカカってから空き隅を占めるなど戦略的で、かなりの打ち手のように思われる。もともと、採譜の習慣が始まったのは16世紀後半、本因坊算砂が棋界第一人者と認められたころと考えられ、棋譜の真偽は微妙だが、戦国武将が碁を好んだこと自体は史実から明らかで、関連文献には信玄の息子・勝頼や真田昌幸の名も登場する。

『甲陽軍鑑』によれば、勝頼は「長篠の戦い」で合戦に鉄砲を集団活用した織田信長の軍に敗れたのち「碁に寝浜 (ねばま = アゲハマを隠す不正) をして勝ちたるに同じ」という言葉を残している。



信玄白番、右上の黒にすぐカカったのが力強い。その後も攻めの姿勢を崩さず実力は現代のアマ高段に近い (1~50)。166手で白中押し勝ち。49(38)

### やさしい 囲碁史

第16回

### 法にも定められた碁

古作 登 (大阪商業大アミュージメント産業研究所主任研究員)

日本で囲碁が遊ばれるようになったのは古墳時代後期で中国隋代の史書『隋書・倭国伝』(7世紀成立) に記されている。また「碁」という文字は『古事記』(712年編纂) の中に「淤能碁呂島 (おのごろじま)」という、国産み神話に登場し、仁徳天皇が吉備の国に行幸するとき立ち寄った島の名前として使われた。

当時碁と同様に人気の高かった盤上遊戯は盤双六で『日本書紀』にも記録が残る。天武天皇 (生年不明~686年) が双六を好み、681年の記述には「辛酉に天皇大安殿に御して王卿等を殿の前に喚して博戯せしむ」とあり、家臣に盤双六 (博戯) を競わせ好成績のものに褒美を取らせたことが分かっている。為政者の前での競技会は江戸時代、將軍の前で対局を披露した「御城碁」に通ずるものでもあろう。双六の名手は荣誉と美利の両方を得ることができた。しかし賭博の要素が強かった盤双六は天武天皇の没後、妻の持統天皇の世になると689 (持統3) 年に「双六禁令」が出される。対照的に囲碁は禁令が出ることもなく平安時代にかけて支配階級の間に広まった。

古代の法にも囲碁に関する記述がある。「養老律令」(757年施行) に「凡そ僧尼、音楽を作し、及び博戯せられば、百日苦使。碁碁は制する限りにあらず」(僧尼令第九条) とあり「歌を作る、または賭け事をした僧・尼には百日苦役を課すが、囲碁や琴を弾くこととは制限しない」という意味だ。



『隋書・倭国伝』に残る日本人が碁を好んだという記述 (水口藤雄氏提供)